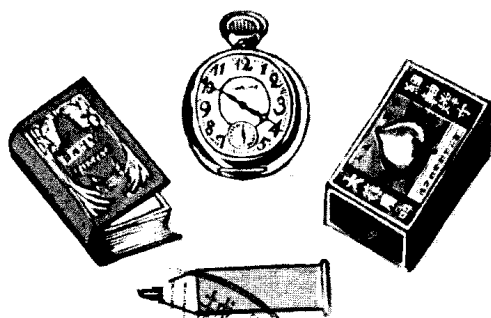




随筆集

書物の心

福永武彦



新潮社版

しょもつ　こころ
書物の心



昭和五十年八月二十五日 発行
昭和五十一年二月二十五日 五刷

定価八〇〇円

著者 福永武彦
ふくなが たけひこ

発行者 佐藤亮一
さとう へい

発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部 東京二六六一五一一
編集部 東京二六六一五四一一
千一六二 振替東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替え致します。

目次

I

夏の悲しみ	13
川端康成氏のノーベル賞受賞	17
「雪国」読後	21
江戸川亂歩の思い出	24
中村真一郎とカツ井	32
フロイトと私	36
手紙について	40
渡辺一夫先生の一面	45
私の揺籃	49

ロートレアモン周辺	53
鷗外のルビ	62
古代人の想像力	65
鷗外全集	70
ブルースト百年祭	78
マチネの亡霊	82
学者の幸福	85
等身大	89
モリエールの訳者	93
源氏物語と小説家	99
川端康成の文芸時評	103

II

梅崎春生	109
夢野久作頌	110
惜命	112
荷風の道	113
或る友情の形見	115
我が立原	116
内田百閒	117
詩人哲学者	118
詩の愉しみ	119
鏡花の美	120

III

花田清輝「復興期の精神」	123
ボーヴォワール「招かれた女」	126
「アポリネール詩集」	129
J・グリーン「真夜中」	130
「リルケ書簡集」	132
河上徹太郎「私の詩と真実」	135
モーリヤック「ガリガイ」	137
三島由紀夫「潮騒」	139
J・グリーン「四角関係」	141
中村真一郎「冷たい天使」	143
石川淳「虹」	145
曾野綾子「遠来の客たち」	147

室生犀星「随筆女ひと」	149
加藤周一「ある旅行者の思想」	150
ヴァルジンスキー「死者の国へ」	152
グラック「アルゴオルの城」	154
桂芳久「海鳴りの遠くより」	156
室生犀星「誰が屋根の下」	158
「定本蒲原有明全詩集」	160
梅崎春生「つむじ風」	162
「ロートレアモン全集」	164
神西清「灰色の眼の女」	165
石川淳「諸国崎人伝」	168
室生犀星「杏っ子」	169
井上靖「天平の甍」	173

松本清張「眼の壁」	175
伊藤信吉「高村光太郎」	177
矢内原伊作「芸術家との対話」	179
サド「悲惨物語」	180
室生犀星「我が愛する詩人の伝記」・濱谷浩「詩のふるさと」	182
瀧口修造「幻想画家論」	185
石川淳「霊葉十二神丹」	187
佐藤春夫「日本の風景」・井上靖「旅路」	189
森有正「流れのほとりにて」	191
室生犀星「かげろふの日記遺文」	193
谷崎潤一郎「夢の浮橋」	197
白井浩司「小説の変貌」	199
「芥川龍之介遺墨」	202

室生犀星「黄金の針」 204

「ゴーガン」 206

寺田透「作家論集・理智と情念・下」 209

「ポボル・ヴフ」 211

フランクフォート「古代オリエント文明の誕生」

213

F・クレー「バウル・クレー」 215

安東次男「澱河歌の周辺」 217

串田孫一「北海道の旅」 219

「萬鐵五郎・小出檐重・古賀春江」 221

中村真一郎「戦後文学の回想」 223

辻邦生「廻廊にて」 225

川端康成「美しさと哀しみと」 227

安東次男「芸術の表情」 231

	粟津則雄「ルドン」	233
	吉田秀和「現代の演奏」	235
	中村真一郎「私の百章」	237
	「ボナール画集」	238
	加藤周一「羊の歌」	240
	中村真一郎「金の魚」	242
	内田百閒「残夢三昧」	244
	埴谷雄高「闇のなかの黒い馬」	246
掲載紙誌一覧		251
後記		256

福永武彦
第五隨筆集

夏の悲しみ

夏に因んだ詩を一篇選び、そこに感想をつけよという、まるで学生時代の試験問題のようなものを出されて、思いつくままにマラルメの「夏の悲しみ」を選ぶことにしたが、翻訳に手間取った上に、その翻訳がいつこうに仕上らないので、書く前からもうくたびれている。夏は怠惰の季節である。

人には一般に夏型と冬型とがあるらしい。好き嫌いではなく、その人が張り切る季節のことだ。私の識る限り、冬型の最たるものは高村光太郎だった。大学を出て初めて就職した頃、私は高村さんのところにしげしげ通う機会があったが、厳寒というのに高村さんは白い上っ張りのようなものを着込んだだけで元氣旺盛だった。私は青年のくせに冬の間は冬眠を自称していた、高村さんから大いに嗤われた。高村さんは夏は駄目だと言われていたが、夏でも暑すぎれば仕事にならないのは当たり前だし、それに冬型の高村さんでも、夏の間は仕事を廃したなどという証拠はまったくない。

マラルメというフランスの詩人は大の寒がり屋で、襟巻をしている写真が有名だが、そのこ

と冬型であることは格別矛盾しないだろう。季節感というのは日本人の専売特許の感があるが、マラルメは難解な詩人だと言われている、微妙な季節感を持っていたことは疑えない。そこでこの「夏の悲しみ」を読んでほしい。

14

太陽は砂にそそいで、お前を眠りこけた闘士の女よ、

お前の髪は黄金のうちにものうい温湯を熱し、

お前のままならぬ頬の上に香を焚きしめ、

恋のみだらな飲物に、涙を混ぜ合せている。

この白い「焰」の不動の熱気がお前を悲しませ、

お前にこう言わせたのだ、お前何と臆病な私の接吻、

「私たちは決して一体のミイラと化すことはないでしょう、

古代の沙漠の、幸福な棕櫚の木のもとに！」

それでもお前の髪は一つの暖かな河の流れ、

そこに身顫いもなく我々に付き纏う魂を濡れさせることも、

そこにお前の知らないあの「虚無」を探し出すことも！